



【花の拡大図】

コチャルメルソウ

木版画
安藤修二

～ 季節 だより ～

春一番の奥多摩歩き。何といってもこの季節、花がメインです。花ときどき緑、ところにより文化財というペースで歩いてみませんか。

川井駅から大丹波川左岸の道を上り、通称「川井ヴィレッジ」を過ぎ、未舗装の砂利道になるあたりからエイザンスミレを筆頭に各種のすみれや有毒のハシリドコロの花が見られます。

木々に覆われ、やや湿り気のあるところではトウゴクサバノオ、コチャルメルソウ、クワガタソウ、かわいそうな名前のヨゴレネコノメなど。次から次へと春を代表する花々が目を楽しませてくれます。

トウゴクサバノオの鱗の尾は、果実の形を見れば、なるほどと思わずにはいられません。コチャルメルソウの花は、おもちゃのラップそっくり。そしてクワガタソウの果実は、五月人形でおなじみの兜についている角のように見える鋏形です。

さらに、ヤマブキソウは、ヤマブキと同時期に咲くやさしげな花。ハルユキノシタは、まさに春に花が咲くユキノシタで、普段見慣れているユキノシタとは一味違った質素な花が魅力的で、4月

の後半～5月に花が咲きます。

このコースは、大丹波川国際釣場がある川沿いの道を歩きますが、時間に余裕があれば、溪流で釣りもいいものです。

釣場から見上げると、対岸に見える寺院・輪光院まで足を伸ばして境内にある大丹波村を救った義民の碑に思いを馳せたり、畠山重忠が通った旧鎌倉街道。一汗かいてツガの大木のところまで5分ほど登れば、山道にナガバノスミレサイシンの群落を見てツガの根元から眼下に大丹波の集落が一望できます。

木の花で特筆するとしたら、イタヤカエデの萌黄色の花と芽。山の斜面を明るい紫色に染めるミツバツツジ。この時期、もう一つの寺院・蟠龍院から見る古里中学校付近のミツバツツジをはじめ桜、レンギョウ、ユキヤナギ等が一斉に咲き、まさに百花繚乱の桃源郷を思わせる雰囲気です。

“三日見ぬ間の桜かな”ではありませんが、桜花咲く大丹波川流域の春は、日々変化します。照る日、曇る日いつでもお出かけください。

(岡崎 学)

～新企画紹介～

1 「じっくり ゆっくり植物観察」

私たち奥多摩観光協会の観光ガイドが案内するイベントは、ハイキング程度の軽い山歩きから健脚向きの登山まで様々です。そして、その殆どは、必ずルートと目的地が設定してあります。道すがら、植物の素敵な花や珍しい植物を見つけても、解散時間が決まっているため、立ち止まると植物観察がなかなかできないのが実情です。この状況は、ゆっくりと植物の観察や写真撮影を希望する参加者にとっては、物足りなさを感じる原因となっております。

実はこの「物足りなさ」は、参加者だけではないのです。「もっと知ってもらいたい!」と思っている観光ガイドにとっても、欲求不満がたまる状況でもあります。せっかく案内するのですから、いろんな植物の姿、森の仕組み、自然の奥行きや深さなど、ひとりで歩いたのでは見落としがちな事象を、是非皆さんにお伝えしたいのです。

この企画は、そういった参加者とガイドの双方の希望をかなえるイベントとして実施します。フィールドは、奥多摩都民の森「体験の森」です。

幸い、この森には沢あり尾根ありと、植物の分布に大きく影響する色々な土壌が広がっています。そんな、地形と植物との関係なども観察しながら、ゆったりとした時間を過ごしましょう。

(堀越 弘司)

2 「石尾根 鷹ノ巣山」

奥多摩の主峰である雲取山から派生する石尾根には、数々の魅力ある山が連なっています。その一つに「鷹ノ巣山」があります。

この山は、奥多摩の他の山からはそのどっしりした姿が眺められると同時に、自身の山頂からは、他の山々の美しい姿を見渡すことができる山です。

山行は、東日原でバスを降り、巳の戸橋へ下り、覆いかぶさる稲村岩を見上げながら鞍部まで登ります。一息入れて奥多摩でも有数な急登への挑戦です。シグザグ道を、一步一步踏み締めて登るうちに、ブナの木が目につくようになってくると、間もなく、平坦地の「ヒルメシ食いのタワ」に到着です。ヒルメシはお預けに、さらに一汗かくと、突然に雄大な景色が目に入ります。鷹ノ巣山山頂です。

富士山を中心に、三頭山・御前山・大岳山の奥多摩三山を始めとした奥多摩の山々、奥秩父の山並み、それに丹沢方面の大パノラマが待ち受けています。

下りは、避難小屋まで下って石尾根と分れます。や

がて、見事なカラマツ林に出会うと、程なくひなびた浅間神社の境内に入っていきます。標高 1,000m以上ある“奥”の集落へは間もなくです。ここからは、昔の道で、蛇行する車道を横切りながら、終着地峰谷のバス停へ下り、山行の終了です。

奥多摩町で、余韻を楽しんでお帰りください。

(高野 義男)

3 「倉沢の檜と滝を楽しむ」

JR奥多摩駅から鍾乳洞行きバスを利用、倉沢橋で下車。バス停から 200mで倉沢のヒノキの案内板が設置されている。そこから急な山道を 15 分程頑張ると、



倉沢のヒノキ 画:平岡忠夫氏

巨大なヒノキの前に辿り着く。

樹高 33m、幹周 6.1m、樹齢推定約 1,000 年のヒノキの巨樹は東京都指定天然記念物である。倉沢のヒノキは、好みの環境にあるためか、樹齢が 1,000 年とは思えないほど若々しい樹勢が保たれている。ここで佇むと、元気がみなぎってくる不思議な気を感じる。

ヒノキの巨樹から元気をもらったら、倉沢谷へと下るが、倉沢橋バス停へ戻っても良いが、倉沢の集落跡方向へ下り、そのまま倉沢谷の林道へ入るのも趣があって面白い。汗ばむ夏のシーズン中でも倉沢谷は涼しく、清々しい。針葉樹と広葉樹がバランス良く生育し、倉沢谷の渓谷美を創り出している。特に針葉樹のヒノキやスギの木には、身体に良いとされるフィトンチッドという成分があるので、たっぷり森林浴を楽しみたい。

倉沢谷には、今は閉鎖となってしまった倉沢鍾乳洞があるが、倉沢鍾乳洞は切り立った石灰岩の洞口から奥までは総延長が約 1,400mもあり、洞内には池や支洞、枝支洞が無数に広がる神秘的な洞窟であったという。中に入れないので、空想に浸りながら、さらに奥の魚留めの滝まで往復して、道すがらイワタバコ等、山野草と倉沢谷の渓谷美を楽しもう。

(小川 恵子)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その11 ～

「十二天神社と2件の救助出動」

気になっている場所があった。小菅集落から三ノ木戸山方向をみると、家入沢(いやいりさわ)の源頭部辺りに尖った山が突き出ている。山頂付近はこんもりと黒い針葉樹の大木に覆われ、そこに「十二天神社」が祀られているという。

日本神話に見られる天地創造の神、天照大神の御孫邇邇芸能命(ににぎのみこと)一行が豊原瑞穂(とよあしはらみずほ)の国(日向の高千穂の峰)に天降ったというストーリーに連想されるような、尖り山の神南備(かむなび)、寒々とした孤高の山容。宗教的な響きの「十二天」。気にはなっていたが、そこは東京農業大学の演習林の中にあり、なかなか訪れる機会がなかった。

十二天とは仏教流布以前の古代インド神話やバラモン教の神々が仏教に取り込まれ、四天王などと同じように方角を護る「護方神」となったもので、上下、日月、四方、四維を守護する神である。即ち梵天(ぼんてん・上)・地天(じてん・下)・日天(にってん・日)・月天(かいてん・月)・帝釈天(たいしゃくてん・東)・閻魔天(えんまてん・南)・水天(すいてん・西)・毘沙門天(びしゃもんてん・北)・火天(かてん・東南)・羅刹天(らせつてん・西南)・風天(ふうてん・西北)・伊舎那天(いしゃなてん・東北)の十二天で、日本では平安初期の9世紀から画像の作例があるという。神社も少ないが何ヶ所かあるようだ。有名なのは埼玉県本庄市の秋山十二天社である。新編武蔵風土記稿の秋山村の項では「十二天社 村の南方にあり大同年中の勧請と云い那賀郡十四ヶ村惣鎮守なり、この社あるをもて、ここを十二天社と呼べり」とある。秩父の三峯神社や川崎の川崎大師などとともに関東十霊場に数えられているという。

奥多摩の十二天神社について記録されたものはないかとずいぶん探してみた。西多摩神社誌や奥多摩町誌には載っていない。他の地誌などを見ても載っているものはなかった。

ただ昭和20年に28歳で夭折した奥多摩研究家、宮内敏雄氏の著書「奥多摩」で十二天に関する記述を見つけた。「此の地方で有名な神社がある。祭神は天神七代地神五代、即ち国常立尊(くにのとこたちのみこと)、国狭槌尊(くにのきつちのみこと)、豊斟淳尊(とよくむぬのみこと)、泥土煮尊(うひじのみこと)、大戸之道尊(おおどのじのみこと)、面

垂尊(おもだるのみこと)、伊弉諾尊(いざなのみこと)と天照大御神、天忍穗耳尊(あめのおしほみのみこと)、瓊々杵尊(ににぎのみこと)、彦火々出見尊(ひこほほでみのみこと)、鵜飼草葺不合尊(うかやふきあえずのみこと)だと高倉亀太郎氏の『山の巡礼』に見られるが、同じ十二天山でも、武蔵児玉郡の十二天と較べてみて興味がある。」とある。

さっそく昭和6年頃出版になったという高倉亀太郎氏の「山の巡礼」を図書館で探した。インターネットで国会図書館の蔵書を検索したりしたが該当する書物はなかった。

以前日原の「一石山神社」について調べたときに集めた資料の中に、青梅法人会の会報コピーがあった。そこに法人会事務局長として活躍された高橋英雄氏が書いた「多摩源流 心の山なみ(権現の路)」という文が掲載されており、～多摩川上流の神々～で「絹笠より峰畑に至る小尾根筋には十二天の森神社があり、祭神は天神七代地神五代である。」「ここは修験道においての祈禱所であったと伝えられる。」とし、そして「白鳳3年、役の小角が大峰山(奈良)を開く前年、この地に来たり開基せしもの」とある。神話などと同様、これを鵜呑みにすることはできないだろうが、十二天社は古えの昔からこの地に鎮座し、村人に崇め奉られてきたことは間違いない。

この秋、その十二天社の近くで2件の救助活動があり、念願だった十二天との対面が叶った。

11月21日午後10時40分ころ、消防からの転送で「道迷い救助要請」の110番通報があった。本日の朝、日原から鷹ノ巣山に登った男性(40歳)が、六ッ石山を経て石尾根を氷川に下山中、道に迷い山中を彷徨していたところ小さな山小屋が見つかった。今はそこにいるのだが、不安になり携帯電話で119番し救助要請したものであった。小屋のドアには「三ノ木戸山荘」と書いてあるという。

さて寝ようかと思っていたところに、森救助隊長から電話が入った。「消防の山岳救助隊は捜索に出ると言っているの、ウチも出ようと思うが三ノ木戸山荘というのはどこにあるか分かるか」との問い合わせであった。「そんな名前の小屋は聞いたことがない、三ノ木戸山の裾にある集落跡、三ノ木戸、城、農指、峰畑などにいくつかある別荘にも、三ノ木戸山荘などというものは記憶にない」と回答したが、遭難者のケータイもすでに不通となっていることから、森隊長以下4名でこれから入山するという。

私も寝ないで連絡を待っていた。午前2時ころ奥

多摩交番に電話を入れてみた。遭難者は発見できず、警察、消防の救助隊は一旦捜索を打ち切り、夜明けを待って再捜索するとの事であった。私も床にいた。

夜が明けた。私は週休であったが、見つからなければ捜索に出ようと思って、午前7時奥多摩交番に電話を入れた。遭難者は発見になり、いま消防のヘリにピックアップしているところだという。

夜が明けてから渡辺、佐藤両隊員が石尾根に登り上げ、狩倉山に向おうとしたところ、無線で「消防のヘリが十二天山周辺で遭難者らしい人影を発見した」との連絡が入った。尾根上から北側下方の家入沢源頭部辺りに、消防の赤いヘリがホバリングしているのが見えた。そんなに遠くではない。ふたりは道のない尾根をヘリを目指して下った。200mほど降りるとヘリの下に着いた、そこにはまだそんなに古くはない一坪ほどの小屋が建っており、遭難者と思われる男性がいた。どこもケガなどはないというが、ヘリから降下した消防航空隊員は、遭難者を一応病院に運ぶという。ふたりでフォローし、小屋から少し離れた位置からヘリにピックアップして病院に運んだ。

男性はどこもケガはないのだから、すぐ病院から帰された。奥多摩交番に来て森救助隊長に遭難の経緯を説明した。

六ッ石山から石尾根を氷川に下る際、たぶん三ノ木戸山辺りだと思うのだが道に迷い、尾根を下った。しばらく彷徨していると、無人の小屋が見つかった。仕事道らしい踏み跡もあり、道沿いには家入沢から水を取っていると思われる取水管が続いている。まだ午後2時だったし、これを迎れば下山できると思ったが、疲れていたのと小屋に毛布などもあったので、ここで1泊していくことにした。

夜になって、小屋の中にひとりであるのが寂しくなった。急に不安になってきた。

午後10時を回った。確か小屋のドアに「三ノ木戸山荘」と小さくマジックで書いてあったのを思い出した。携帯電話が通じたので、思わず119番通報して救助要請をしたものであった。

何という男だ。ケガをしたわけでもない、明るいうちに下山する気になればできたはずである。夜になって寂しくなったから救助要請したなどとは全く40男の常識外れの行為だ。彼の救助要請で、消防と警察の救助隊は夜も寝ないで危険をおかし、2日に渡り捜索活動をした。消防はヘリコプターまで出して捜索に当たったのである。登山者のモラルというより人間としてのモラルを逸脱した行為と言われてもしかたがない。私は救助隊員としてでなく、同じ山ヤとして、呆れを通り越して怒りさえおぼえた。

後日私は渡辺隊員と現場を訪れた。東京農業大学の敷地内を通り、林道を進むと十二天山が終点である。そこは私の気になっていた十二天山である。岩尾根を少し下ると、そこには神社と呼ぶにはあまりにも小さいお堂がポツンと佇んでいた。中にはコンクリート製の祠が入っており、お堂の前には風化されその表情も読み取れない一対の狛犬が立っていた。やっと対面できた歴史ある十二天山に、私は神妙に手を合わせ頭を垂れた。

現場はそこから等高線沿いに約20分、家入沢方向に仕事道を辿った所である。農大演習林となっているため、休憩所として建てられた小屋がそこにあった。家入沢の源頭部で、農大がそこから水を引いている取水口もあった。私は小屋のドアに「三ノ木戸山荘」とマジックインキで小さく書かれた文字を確認し引き上げた。

11月30日午後2時13分、家入沢上部で変死体発見の110番通報が入った。家入沢の沢登りに来た八王子の登山グループ10名が、家入沢源頭部の水が無くなった辺りで、倒れている男性と思われる遺体を発見した。携帯電話が通じる石尾根に登り上げてから110番通報したものであった。遺体の側の立木に目印のスリングを巻きつけてきたという。

家入沢源頭部は先日救助した辺りである。救助隊員5名で山岳救助車に乗り込み農大の林道を十二天山社まで入り、そこから小屋を目指して徒歩で家入沢に向った。

三ノ木戸山荘から取水口まで行くと、涸れ沢の岩の陰にボストンバック様のものが枯れ葉に埋もれて見えた。沢に降りて確認すると、バッグとスニーカー、シャツなどが枯れ葉の間から出てきた。腕時計もあり、まだ動いていた。沢の中を下っていった隊員が、約200m下で腐乱しはじめた男性遺体を確認した。靴を脱いでそこまで降りていることや、シャツまくり上げて上半身を出していることなどから、凍死の可能性が高い。日没も近く今日中に收容するのは無理なので、明日新たな編成で当たることにし、一旦全員で引き上げた。

翌日刑事課員も同行し現場に向かい、現場付近の実況見分を実施した。救助隊員は遺体をバスケット担架に收容し、側壁をオデッセイ（引き上げウインチ）を使用し仕事道まで約100mを引き上げた。そしてもうすっかり通い慣れた仕事道を、バスケット担架を引きずり十二天山社まで搬送、遺体を刑事課に引き継いだ。

靈気漂う十二天山の森近くで、つい最近発生した2件の救助出動であった。

（青梅警察署山岳救助隊 副隊長 金 邦夫）

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(13)

大字氷川は、奥多摩町の北側、埼玉県境から南の檜原村境まで、縦長に続く地籍です。上の半分は、川苔谷両岸の地籍で占められ、下半分の中程に集落が固まっています。底の部分は、大澤入が占めています。

「長畑」は、江戸初期の検地帳に、「なかあた」、「長わた」、「長田」とあり、今でも「ながあた」という発音で呼ぶ人もいますので、昔と変わらず推移していることとなります。愛宕山の裾が東へ細長く続く地形です。

「登計(とけ)」は、「とつき」、「とつけ」から転化した地名で、奥氷川大明神の神奈備山(かなむびやま)愛宕山の突起が語源とされています。

「小留浦(ことずら)」は、小河内にある「留浦」、「小留浦」とどういった関わりがあるのか、「とずら」とは、葛が一面とところかまわずに、はびこっている状況、からまり、とじかっている様子が語源とされています。

「槐木(さいかちぎ)」は、むかしみちコースの途中にあり、地名の元となっているサイカチの木の

山手には、木食上人所縁の木食堂と念仏標柱があります。

大ダワで檜原村と境を接する「大澤入」は、氷川地籍の中では大きいほうで、ここには、檜原村神戸へ抜ける鋸山林道が開けています。

「昔、大澤入の池の平という所に、大きな池があり、大蛇(龍)が棲んでいました。ある大雨の晩、小姓風のなりをした者が、大澤入の民家の門口に立って、提灯を貸してもらいたいと頼みました。家の者が、快く提灯を貸すと、この者は、『これから大水が出るが、この家は流されない。』と言って立ち去りました。それから一晩中降り続いた大雨は、山の尾根や沢筋から泥水となって押し出して、池の平の大池も決壊し、民家も畑もあらかた押し流して、登計のハケまで押し出してきました。弁天の池は、この時の大荒れで出来た池だといわれています。なぜか、この大荒れでも一軒の民家だけが残ったということです。池の平の大蛇(龍)は、一度、弁天の池に移り棲み、その後、川苔谷の方へ棲家を変えたということです。」

【資料】奥多摩町誌、広報おくたま(岡部義重)

奥多摩歳時記

春の野山の野鳥

“世の中は、三日見ぬ間の桜かな”とはよく言ったもので、気がつけば4月。サクラ前線北上中。奥多摩の山々は、もう木の芽を精一杯ふくらませ、芽吹きチャンス待ちを待たせている。

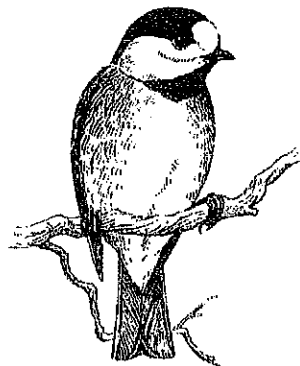
ある日突然、明るく発光し、コナラ等の若芽がいつせいはじける。そして、奥多摩の至る所が、野鳥たちのさえずりで賑やかになる。ウグイスは、ホーホケキョと美声を聞かせながら、山地へ移動し、繁殖に入る。

次に里山でよく見かけるのは、ホオジロだ。平地の草原・林などに棲み、農耕地の春を代表する鳥だ。メジロ、ウグイスと違って、地上で餌を探して生活している彼らは、繁殖期、周囲の見通しのきく木の上などでさえずる。スズメによく似た地味な姿だが、目の上と頬の白さがきわだつ鳥で、スズメより少し大きい。

そして、住宅地でもよく見かける鳥は、シジュウカラだ。首から腹にかけて黒い帯状の模様があり、なかなかお洒落だ。早いものでは繁殖をすませ、二度目の繁殖に入るものもいるようだ。ツツピー、ツツピーと透き通る声でさえずる。

また、ヤマガラ、ヒガラ、メジロ、エナガ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、そして奥多摩を代表する鳥・ヤマドリなど、早春から初夏にかけて繁殖する。ツグミ、アトリ、ジョウビタキなど、冬鳥たちが北帰行を開始し、漂鳥のルリビタキ、シメ、トラツグミなどは、日本列島を北上または山や高原などに移動する。入れ替わるように、夏鳥たちが日本列島にやって来る。そして、奥多摩の山里も、野鳥たちのさえずりで一挙に賑やかになる。

(畑 幸雄)



ヤマガラ

ガイドだより ～奥多摩の有害動物雑感～

奥多摩で遭遇して怖い動物は、命に関わる有害ヘビの仲間である。

ガイド中でも、山のふるさと村～いこいの路、むかし道、そして川乗谷の林道などで、マムシ、ヤマカガシに出会うことは多いが、ほとんどの場合、ヘビの方から逃げていく。

マムシは頭部がやや長く三角形で、身体の銭型斑紋が特徴で、体長は 60 cmほどである。ヤマカガシはやや大きく、黒緑色の斑紋があり、前半部に赤色の斑紋があるのでマムシと区別できる。

マムシは、神経性の出血毒を含み、噛まれるとまず大きく局所が腫れ、痛みが全身に広がる。そして、赤血球の破壊が進むと、全身の皮下出血と吐き気、唇の痺れが起こる。

ヤマカガシの毒も神経毒であるが、直ぐには症状が現れず痛みも少ない。気分も比較的落ち着いているが、数時間後、血液凝固能力を失うと、血尿、血便、全身の皮下出血、そして腎機能障害が出てくる。

ヘビに噛まれた場合の応急処置は、安静にして、局所から心臓寄り部分を軽く圧迫する。治療は、いずれも血清が有効なので、ヘビの特徴を覚えておき、救急病院へ急行する。

雨の林道では蛙を見ることがあるが、ヒキガエル(ガマ)は後頭部にある耳腺・皮膚腺から毒液を分泌することが知られており、人の粘膜に触れると炎症を起こしたり、蛙の絶滅が危惧されるツボカビ病予防のためにも蛙に触れないことが一番大切である。

奥多摩の山林で増えだした有害動物にヒル(蛭)の仲間がある。ヤマビル、チスイビルそしてハナビルは、山地の樹上や落葉の下に潜んで人に接近して取り付き、体重の 10 倍の血を吸う。

これらのヒルには毒はないが、吸盤に吸い付かれると、唾液に血液凝固抑制物質があるため、痛みを感じないまま多量の出血後、吸着に気がつく。

温暖化現象の影響か丹沢山塊から北上しているとの報道があり、奥多摩でも要注意の環形動物である。

最後に、奥多摩でも被害の出た大型有害動物であるツキノワグマ。彼らの生息場所が狭められた現在、人がアウトドアを楽しもうと思えば接触機会が増える。山で遭遇しないためには、地元の最新情報入手し、生息域に入った場合は、鈴、ラジオ、そして歌声などで、人間が居ることを知らせるための工夫が必要である。

(大谷 武彦)

施設案内

◆ TOKYOトラウトカントリー

巨岩帯を貫く日原川の中核部にある、ルアー、フライ、テンカラ専用の溪流釣場です。

場所 奥多摩町 日原 68

(旧大沢国際鱒釣場)

問合せ Tel 0428-83-2788

営業時間 7時から17時(夏季のみ19時)

料金 1日券 4,000円

(女性・中学生以下 3,000円)

半日券 3,000円

イブニング券 2,000円

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 5月15日(金) 新緑の海沢の滝めぐり

応募締切日 4月25日(登山)

② 5月19日(火) 新緑の奥多摩湖いこいの路に親しむハイキング

応募締切日 4月25日(ハイキング)

③ 5月26日(火) シロヤシオを訪ねる

(ソバツツ山)

応募締切日 5月10日(登山・健脚)

④ 6月2日(火) じっくり・ゆっくり植物観察

応募締切日 5月15日(ハイキング)

⑤ 6月2日(火) 石尾根 鷹ノ巣山

応募締切日 5月15日(登山・健脚)

⑥ 6月10日(水) 三頭山から山のふるさと村へ

応募締切日 5月25日(登山)

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成21年7月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会